

平成 21年 6月 10日現在

研究種目：基盤研究（C）（一般）

研究期間：2006～2008年度

課題番号：18530385

研究課題名（和文）

ボランティアセクターとしての住民による資源管理と地域経営に関する権力論的考察

研究課題名（英文）

Consideration about resources management and local management by the inhabitants as the voluntary sector from a viewpoint of the power theory

研究代表者

家中 茂（YANAKA SHIGERU）

鳥取大学・地域学部・准教授

研究者番号：50341673

研究成果の概要：

沖縄の事例一座間味村のサンゴ礁保全利用、恩納村の沿岸資源管理、竹富島の町並み保全などをと、住民の自発的な取り組みとしての地域資源管理のあり方や地域経営のための仕組みづくりについて考察した。そのなかでもとくに、地域をとりまく諸条件（内外の権力関係や歴史的経緯）に規定されつつ、自然が「資源化」していく過程、あるいは、地域生活規範にもとづいて住民組織が再編されていく過程について注目した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,700,000	720,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：①コモンズ ②資源管理 ③地域経営 ④まちづくり ⑤担い手

⑥ボランティアセクター ⑦景観論 ⑧多面的機能

## 1. 研究開始当初の背景

持続的社会発展を構想するなかで、近年、コミュニティベースの資源管理に対して関心が高まっている。本研究もその一端を担うものである。しかし、従来のコミュニティベースの資源管理論では、資源管理システムがあらかじめコミュニティに備わっているかのような静態的な捉え方が多かったように思われる。その結果、たとえば「コモンズの悲劇」を批判してなされているコモンズ論であっても、近代化のなかでやがてはコモンズの利用が衰退するという、結果としては、批

判対象である「コモンズの悲劇」を迫認するような論理に陥っている場合もみられる。

そのことから、コミュニティベースの資源管理について考察を推し進めるには、歴史的社会的諸条件、自然生態的地理的諸条件に規定されつつ、それがどのように立ち上がってくるのか、動態的プロセスに着目することが重要であるといえる。また、開発とのせめぎ合いをつうじて、あるいは、生活の必要に応じて、住民組織の再編や地域資源の再配置が起きていく力関係についてみていく必要がある。「生成するコモンズ」とは、このよう

な関心から、資源管理システムが形成されてくるプロセスに注目する。

## 2. 研究の目的

沖縄の離島地域の事例を取りあげ、地域住民の生活規範に注目し、外部からの開発など近代化の諸力に対して地域住民が地域生活規範にもとづいてどのような生活戦略を立てるか、地域資源の再配分と社会関係の再編においてどのように主体性を発揮するのかを分析する。そのために次の諸点に着目する。

- ①生成するコモنز—社会的諸状況に規定されつつ自然が資源化するプロセス及びそのなかでの地域生活規範のはたらき
- ②ボランティアセクター、社会的経済という視点からの開発概念の捉え直し
- ③資源をめぐる権力—資源の再配置と社会関係の再編における住民の主体性の発揮

これまでのコモنز論は、コモنزを実体視して、資源管理システムとして論じてきた。排他的独占的所有という近代的な所有権制度を相対化するために、人の自然への「多様ななかかわり」を強調するときでも同様であった。それは程度の差があったとしても、生活のうえで必要とされる資材として自然を人間の側が主体となって利用する、という捉え方であった。

しかしながら、自然とのかかわりというとき、常に人間の側が主体であるとは限らない。むしろ自然によって規定され支配されるような側面もあるはずである。人と自然とのかかわりをこのように、人と自然との相互性及び歴史性に規定されて形成されるものとして捉えることが、「生成するコモنز」すなわちコモنزの生成過程について考察するうえで重要と思われる。

人々が生活のなかで「自然」をどのようなものとして経験しているのか、自然とのかかわりの経験という基盤があってコモنزが立ち現れるのではないか。生成するコモنز論は、このような<人—自然>関係の基盤として地域生活規範に着目する。

一方、グローバル化が進展するなかでの「開発」概念の捉え直しについても検討を進める。すなわち、グローバル化による文化や景観の単純化としての開発ではなく、文化や潜在的可能性を発展させるものとして開発を捉え直す。それは、開発や経済というもののあり方が人々のどのような想念から発して形を成しているのか、そこに自然とのかかり方の生活規範がどのように働いているか、について考察することになる。近年、政策上関心がもたれる「景観」について考察する際にも、このような捉え方が重要となる。

生成するコモنز論においては、さらに、自然が資源化するプロセスについて注目する。地域組織の再編や資源の再配置において

発揮される住民の主体性に注目する一方で、主体化と資源化の相互作用のプロセスにも注目し、どのようなマクロな社会関係に規定されて、どのようなミクロな仕組みが生成しているのか検討する。

以上の諸点について分析をするために、次のテーマによる各地の事例研究を積み重ねていく。

- ①歴史的環境保全をつうじての地域づくりに関する事例研究<景観形成論>
- ②沿岸資源管理をつうじた地域社会の再編に関する事例研究<自然の資源化過程、多面的機能論>

## 3. 研究の方法

住民の地域生活規範や生活のなかでの自然の経験について考察を深めてきたのは、村落社会学における生活論、環境社会学における生活環境主義である。本研究も、鳥越皓之や嘉田由紀子によるその分野における研究蓄積に方法論的な基礎をおく。なかでも土地所有論や重層的資源利用論は、自然が資源化するプロセスの動態的把握、あるいは、景観形成をつうじた地域資本（社会関係資本、環境資本）の増加を捉えるうえでも有効な分析枠組となる。また資源化過程における権力関係や相互作用を考察するうえでも有効である。

このような分析枠組をもとに、沖縄を主とした事例地において長期にわたって反復的なフィールドワークを実施する。とくに住民からのヒアリングや地域の様々な活動における参与観察を行う。

## 4. 研究成果

研究成果については、後述のリストにあるように、学会誌論文、学術図書において発表した。以下その要点を記す。

- ①景観形成（雑誌論文：家中 2009、2008、学術図書：家中 2009b、2009c）

竹富島の町並み保全を事例とした調査研究を実施した。竹富島は、種子取祭という無形の文化財と赤瓦の町並みという有形の文化財があり、町並みを地域資源として活用した観光は内発的発展の成功事例として評価されている。このような伝統的歴史的資源が維持されるには、社会的条件の変化に応じた地域住民組織の再編がある。その過程を考察するうえで、とくに景観が形成され維持される際にはたらく地域生活規範に注目した。また、石垣島白保、沖縄島恩納村における地域資源の生成や住民組織の再編過程についても検討し、住民の主体性が発揮されるには、そのための社会的仕掛けの創出が重要であることを指摘した。すなわち、「地域生活規範とは、住民によってそれと意

識されずとも働いている『選択の基準』のことととらえてよいだろう。それが『生活の仕組み』をつくり出しているのであり、結果として、町並み景観を維持する力ともなっているのである。ところで、このような『選択の基準』はそれが生活意識である限り、町並み景観だけに現れるのではなく、住民組織の再編のあり方など、生活をつくり出すほかの諸相においても現れているはずである。言い換えれば、住民が追求する快適さのなかに町並み景観の美しさも含まれるのは、どのような生活のありようを望ましいとするのか、住民自身の選択が働いているからだといえる。先に述べた『島の意志』とは、この選択の基準、すなわち地域生活規範のことを指しているといつてよい」(家中 2009a:76-77)。

「竹富島の観光の目玉が町並み景観であることはいうまでもない。この町並みのたたずまいはあくまでも竹富島に暮らす人びとの『生活の集積』として存在するものであって、誰かが意図的につくり出したものとはいえない。町並み景観を構成する家屋敷は、竹富島固有の自然条件、すなわち、リーフに囲まれた同心円状の地形や、材木を西表島に頼るような資源の制約のなかで、石垣を積んだり、家の材木を選び、組み立て、基礎を打ち、屋根を葺いたり、壁をこしらえるなど、すべて『ユイマール』(結い)という共同作業によるものである。そのような共同の力を寄せ集めた結果が、いまの家屋敷の形をつくり出し、さらにまた、その家々の集積がこの町並み景観をつくり出している。そのなかでとくに注目されるのは、竹富島は資源に乏しいゆえ建材を西表島に求めなくてはならないことから、建材を使い回したり、あとで再利用することを前提とした使い方をするなど、資源上の制約を乗り越えることをとおしてむしろ独特の創意工夫が家の建築の随所に現れている点である。このことは個々の家の建て方の特徴にとどまらず、固有の自然条件に規定されつつも、この島に住みつづけることを通じて発揮されてきた人びとの創意工夫が集落のかたちにも現れているといえるのである。すなわち、地域の共同の力、共同の知恵や経験がかたちとして現れているのが町並み景観であり、さらにはこれを取り巻く島の景観なのである」(家中 2009:89-90)。

「本章でとりあげた竹富島においても人びとは、外部から寄せる社会条件の変化に対応するのにコミュニティ組織を再編しつつづけている。そのなかで、人間の都合に合わせるのではなく、祭祀を十全にとりおこなうことを第一義としているように、生活を組み立てるうえでのリアルな基盤が存在する。それが『島の意志』だといつてよい。言葉を換えると、生活の基盤としての『コミュニティというリアリティ』をつくり出すために、竹富時

までは、種子取祭という祭祀をリアルな生活のシンボルとして存在させ、それにうまく対応できるようにコミュニティ組織を工夫してきたのである。それゆえ、住民にとって町並みとは、たんなる物質的資源にとどまるのではなく、それを保持意匠とする実践自体のなかに、島に暮らしつづけていくうえでのリアリティが生成してくるようなものなのである」(家中 2009a:105-106)。

「本章でとりあげた三つの事例において共通していえることは、『地元の同意』や伝統的建造物群保存制度、漁業権制度などを媒介として、開発をめぐる力関係のなかで地域住民がイニシアティブをとり得る社会的な仕掛けを創出したことである。この地域の固有性をもった仕掛けこそがまた、地域資源となっている。地域の固有性とは、現場においては多様性となって現れ、それに対し、外部資本は地域を単純化する性格を持っていることは既にみたとおりである。このそれぞれの地元の姿勢こそが、これからの地域に個性ある景観が現出することに大きく関わっていることはいうまでもない。リゾート開発の反省に立った地域開発においては、地域の内部からの個性を発現させるために、この種の社会的な仕掛けの創出が重要な課題といえよう」(家中 2009b:197)。

「沖縄の三つの地域において、人びとの生活がつくり出す景観についてみてきた。それは、沖縄の『本土復帰』後の社会状況の推移に応じた、地域内部外部の諸力のせめぎ合いのなかから現出してくるとともに、いまに先立つ世代の人びとの想念や活動の結果に、意図せずとも色濃く規定されていた。すなわち、地域の個性ある景観とは、香月洋一郎が『人の手の加わった景観からは、群れ集まり、これまで住みつづけて、これからも住みつづけてよとする集団としての意志が読みとれるのではないか』というように、そこに人びとの生活の軌跡を認めることができる。そして、それはたんに過去の行為の結果が示されているということにとどまらない。むしろ、現前する景観の奥にそれを残した人びとの想念や経験の蓄積を見出すことで、いまを生きる人びとの生活のありようが選択されているといえよう」(家中 2009b:202)。

## ②自然の資源化(学術図書:家中 2007、家中 2009)

時代の変遷とともに生じる社会関係の変化に応じて、人びとと自然とのかかわり、とくにその資源として価値や意味づけは変化していく。そのことを慶良間海域のサンゴ礁をとりあげて分析した。すなわち、自然が資源化するプロセスと社会関係の再編がどのように関わっているかについて考察した。

琉球王府時代、「貝の交易」を担った進貢

船の船頭として活躍したのが座間味島民であった。明治期には沖縄におけるカツオ漁業・鯷節製造の発祥地となり、それが廃れると、こんどはダイビングスポットとして注目されるようになる。おなじサンゴ礁という自然でありながら、カツオ漁に不可欠な「生餌」の漁場となったり、それがダイビングの対象となったりする。マクロな社会構造の変化に規定されつつも、資源利用において住民はイニシアティブをとれるような社会関係を形成していく。そのための正統性の源泉として、漁業権制度や科学的知識、研究機関などが取り込まれていくのである。

漁業・漁村の多面的機能を考える際にも、人びとの生活戦略という視点から、資源の重層的利用（嘉田由紀子 2001『水辺暮らしの環境学』昭和堂）や「働きかけの対象になる可能性の束」としての資源（佐藤仁 2008『資源を見る眼』東信堂）の捉え方が重要となってくる。恩納村漁協による資源管理型漁業を事例にこのような課題について考察した。すなわち、

「座間味においてダイビングサービスが新たな事業として根づくためには、さまざまな「資源」が経営体のもとに再配置されなければならない。まず、ダイビングというマーケットが存在しなければならないのはいうまでもない。しかし、それだけでは事業は成り立たない。ダイビングの観賞対象としてのサンゴ礁（商品としてのサンゴ礁といってもよい）は当然のことながら、資金力、船舶や港湾などの諸手段の利用を可能とさせる個人的技能や社会的地位（座間味では港湾は漁港であり、漁協との関係が不可欠となる）、さらには、サンゴ礁の地形や魚類の生態、座間味近海の海流や天候についての深い知識など、ダイビングサービスに必要とされるいっさいが『資源』として動員される。すでに各種メディアによってイメージ資源化されている『沖縄のサンゴ礁』『青い海と青い空』などの物語性も重要な資源である。座間味が琉球王府の時代には進貢船の船頭として活躍したちおう歴史的事実や鯷産業の隆盛をいまにとどめる『慶良間節』のブランド名も、『海の民』座間味の名声を高める資源として組み入れられる」（家中 2007:98-99）。「このように経営を維持するために戦略を練り、そのもとにさらに新たな資源を組み込み、再構築するフレームに適合的な価値を既存の資源に対して付与すること、つまりは、異なるコンテクストにあった諸資源を自らの経営というフレームのもとに配置し直すことをおとして、これらの資源をとりまく社会関係の再編が遂行されていくのである。それだけに、どのような社会関係のもとに再配置されるのかに応じて、資源としての価値も増減し変わりもする。／繰り返すが、座間味におい

てダイビングサービス事業を成立させるということは、このような諸条件を適宜選択し、ひとつのフレームのなかに再配置していく過程のことである。そして、このとき、どのように諸条件を組み合わせて資源を再配置するかという点において主体の創造性が発揮されるのである」（家中 2007:99）。

「ある事物を自分の資源として再配置するのに成功するということは、同時に、相手によっても自分が資源として再配置されることを意味する。サンゴ礁という資源を発見して、ダイビング事業を興し、本土からの観光客をその資源として再配置するということは、ダイビング産業のなかに自ら組み込まれるということ、そのマーケットにおいて自己の商品化が起こることでもある。そして、サンゴ礁の貴重性やダイビング業者のサンゴ礁保全の効果が科学的データによって実証されるということは、科学的実証や研究機関という正統性をダイビング業者が自らの戦略の資源として獲得したことを意味するが、同時に、その正統性を手中にしつづけるには、サンゴ礁保全をさらに徹底し、エコリズムの実践者としてありつづければならぬことになる。他者を資源とする再配置において主体性を発揮するということは、このように主体化と同時に自らが他者によって資源化されることであり、一方にとっての主体化は他方にとっての資源化であるという、相互作用の過程をとおして遂行されていくのである。／それが、主体性を発揮しながらもマクロな社会構造のなかに巻き込まれ、資源化されることだといえる。しかし、それでも、どのような事物（自然）をどのようなコンテクストのうえで資源として配置するか、その組み合わせから新たなフレームを創り出すという点において、人びとが発揮する創造性を見出すことはできるだろう。すなわち、本来その目的のためにつくられたものではないものを何とか工夫してつかおうとする『プリコラージュ』という手法（小田 2000、2001、松井 2002）のなかに、あるいは、受身的存在としてマクロな外部条件に一方的に規定されるとは限らない生活者の『範列的知識の操作』（古川・松田 2003）のなかに、人びとの実践のもつ創造性が見出されるのである」（家中 2007:114-115）。

「沖縄におけるふたつの事例を通して、地域資源の生成プロセスと、それに伴う地域資源の利用主体の形成プロセスについてみてきた。そのことから『可能性の束』としての資源の層から何がどのようにし資源として取り出され財（財の層）に変換されるかが重要であり、地域資源を地域資源としてとどめておくためには、そこに何らかの仕組みが介在する必要があることが理解されるだろう。事例では、自主的な資源利用のルールをつうじ

て地域資源の持続的利用が可能となるとともに、コミュニティを存続させていくための産業の地域化・生業化が促されていた。具体的には、座間味村ではオニヒトデ駆除や保全利用ルールにもとづくダイビングサービであり、また、恩納村では地域営漁計画にもとづく資源管理やサンゴ礁保全活動であった。どちらの事例においても、このような地域資源の保全利用の取り組みが『慶良間の世界』や『美ら海育ち』という地域ブランドの創生につながっている点も注目される」(家中 2009a:82)。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 2件)

- ①家中茂, 2009, 「地方活性化: まちの誇りと活力を持続させる、取り戻すーいんしゅう鹿野のまちづくり」日本都市計画学会編『都市計画』: 51-54、査読無 (依頼原稿)
- ②家中茂, 2008, 「地域コミュニティの現在: 沖縄における研究動向と竹富島の事例から」日本地方自治学会編『地方自治叢書 20 合意形成と地方自治』敬文堂: 105-133、査読無 (依頼原稿)

[学会発表] (計 2件)

- ①家中茂, 大会シンポジウム「地域漁業と多面的機能ー条件不利化する漁村社会の活性化をめぐるー」にて司会, 地域漁業学会第50回大会, 2008年11月9日, 広島大学
- ②家中茂, 大会共通論題「地域コミュニティの現在」にて「コミュニティ組織の再編にみる開発とのせめぎあいー竹富島の町並み保全を事例に」を報告, 日本地方自治学会, 2006年11月12日, 沖縄国際大学

[図書] (計 6件)

- ①家中茂, 2009a, 「自然の資源化にともなう地域資源の豊富化ー沖縄県座間味村および恩納村の事例から」山尾政博・島秀典編著『日本の漁村・水産業の多面的機能』北斗書房: 59-87, 総頁数 250 頁
- ②家中茂, 2009b, 「コミュニティと景観ー竹富島の町並み保全」鳥越皓之・家中茂・藤村美穂『景観形成と地域コミュニティー地域資本を増やす景観政策』農山漁村文化協会: 69-119, 総頁数 308 頁
- ③家中茂, 2009c, 「開発と景観ー新空港建設・大型リゾートホテル開発・文化財保護」鳥越皓之・家中茂・藤村美穂『景観形成と地域コミュニティー地域資本を増やす景観政策』農山漁村文化協会: 165-212, 総頁数 308 頁
- ④家中茂, 2008, 「コミュニティベースの政策論」藤井正・光多温長・小野達也・家中茂編著『地域政策入門ー未来に向けた地域づくり』ミネルヴァ書房: 84-102, 総頁数 331 頁

- ⑤家中茂, 2007, 「社会関係のなかの資源ー慶良間海域サンゴ礁をめぐるー」松井健編著『資源人類学第6巻 自然の資源化』弘文堂: 83-119, 総頁数 349 頁
- ⑥家中茂, 2006, 「実践としての学問、生き方としての学問」新崎盛暉・比嘉照夫・家中茂編『地域の自立 シマの力 (下)』コモンズ: 7-57, 総頁数 408 頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

家中 茂 (YANAKA SHIGERU)  
鳥取大学・地域学部・准教授  
研究者番号: 50341673